

一橋の女性たち

各界で、ユニークでエネルギッシュな人材が豊富と評判の一橋の女性たち、その活躍分野は多岐にわたっています。

彼女たちは、いかにキャリアを構築し、どのような人生ビジョンを抱いているのか？

HQでは、連載で一橋の女性たちをご紹介します。

第13回は、外交官としてODAの調査・計画にあたっておられる小野日子さんにご登場頂きました。

聞き手は法学研究科の相澤美智子です。

道は求めるものであるとともに、与えられるもの。
人との出会いやつながりを大切にしたい



小野日子 (おの・ひかりこ)

1988年3月一橋大学社会学部卒業、同年4月外務省入省。
1991年英国オックスフォード大学PPE(哲学・政治学・経済学)修了。
1991年帰国後、地球環境問題、対アジア向け円借款、インドシナ地域の政治経済、WTO担当等を経て、2000年より2003年まで在米国日本大使館勤務。
2005年4月よりODA白書編纂、分野別援助政策担当、
2006年8月より国際協力局多国間協力課企画官。

安全指向からチャレンジ派へ、 一橋の雰囲気、私を変えました

相澤 小野さんに最初にお会いしたときのことは、いまでも鮮明に覚えています。外交官としてのお仕事を始められたばかりの小野さんに関する新聞記事を高校3年のときに読んでから、ずっと大切にしていたのですが、会いたいと外務省にお訪ねしたら、とても気さくに対応してくださいました。大学1年の女子学生としては、大感激でした(笑)。

小野 私は、最初から外交官をめざしていたというのではないんです。高校時代にやはり活躍されている先輩のことを知り、外交官という仕事があるんだ、面白そうと思ったのがキッカケと言えばキッカケでした。でも、当時は自分にとっては遠い存在で、将来の選択肢の一つという程度のイメージでした。子どもの頃から漠然と人のためになる仕事かしたいと思っていましたから、はじめは医者になりたかったんです。でも、熱意があっても能力のない医者は最悪でしょう(笑)。広い立場にたつて役に立つ仕事のなかで、自分のやりたいことを見つけよう。選択肢が広がる大学がいいと一橋大学を選んだんです。

相澤 一橋大学には外交官試験をめざす人のための勉強会がありますね。その年に合格した4年生が指導してくれる。私も当時は外交官志望でしたから参加したのですが、3年で度胸試し、4年で本番のつもりで受ける、と言われました(笑)。

小野 ゼミやクラブの先輩にも外交官をめざす人がいて、みんなすごくイキイキしている。その姿が刺激になりました。外交官試験のハードルは高いけど、私も勉強会に参加し、挑戦してみることにしたんです。何が何でも外交官になるとシャカリキにならなかったのが、却ってよかったのかもしれませんね。勉強会では過去問など効率的な勉強ができましたし、「〇〇ノート」と名前付で回ってくる合格した先輩



のノートにも助けられました。私のノートも卒業後に流出したようです(笑)。当時は学内にこうした伝統的な勉強会がある大学は少な

く、一橋大学と慶應大学ぐらいだったと思います。

相澤 一橋大学に入学したことで、自分自身の変化はありましたか。

小野 私自身のスタンスがハッキリ変わりましたね。高校時代までは、8割の力でできることをやろうと思っていました。リスクを取らず、渡れる橋を渡ろうと考えていたんです。でも、一橋大学には360日ボートを漕いでいるといった「ここまでやるか」という学生が大勢いました(笑)。女子高から別世界に投げ込まれたようなもので、発想や見方が変わりました。一橋大学で強さや、チャレンジ精神といったものを得ることができたように思います。もし入学していなかったら、結婚との両立可能という範囲内で仕事を選び、そこにすんなり収まっていた気がしません。

**運を逃さないために
努力を怠らない**

相澤 小野さんは外務省の入省面接で、「結婚や出産後も仕事をつづけますか」と尋ねられ、「辞めない方向で努力しますが、絶対に辞めないというのは不誠実です」と答えられたそうですね。

小野 人生には何が起こるか分からない。そのときにベストの方向で柔軟に対応することが大事だと、いまでも思っています。現在ではかなり増えましたが、私の入省当時、女性の外交官はやはり

少数でした。でも、入省してすぐ先輩女性職員に「結婚を勝手に断念しないように」と言われたんですね。外交官は総合力が勝負だから、意識的に人とのつきあいを広げないといけない。忙しいからと、自分で可能性を切ったらダメ、「結婚してもいいですよオーラを出しなさい」って(笑)。意外に思われるかもしれませんが、外務省は女性だからどうこうという意識の極めて少ない役所なんです。私は93年に結婚し、パスポートの関係で姓を変えたんですが、まわりからは逆に驚かれたほどです。

相澤 小野さんはご主人も外交官でしょう。別々の任地に赴任ということもあるわけですね。

小野 ありますね。

相澤 私は別居ダメ派で、それも外交官を断念した理由の一つでした(笑)。

小野 ただ、私も子どもをもつことには正直ためらいがあり、子どもを産んだのは結婚後10年ほどたってからでした。だけど、子どもがいてもそれなりに道が開ける。案じるより産むがやすしです(笑)。

相澤 女性の場合、あるキャリアのバイオニアになると、とにかく頑張ろうという意識が先立つことも少なくありません。肩肘をはり、頑張り抜いてまわりを息苦しくさせてしまうんですね。でも、小野さんは、すごく自然体。お会いして2年くらいたった頃、「運というものもあるから、運が巡ってきたときに、それをつかめるだけの努力をなささい」と言われた。また、「人のお役に立たせていただける仕事をするのは大切なことだと思うけれど、それは外交官にならなくてもできる」とも言われた。

その考え方に共感したからこそ、ここまで長いおつきあいになったのだと思います。

小野 道は追い求めるものであると同時に、与えられるものでもあると思うんです。いろんな人との出会いやつながりが、いまの自分をつくってくれているわけですし、そういう恵まれている自分を意識しないと



相澤美智子
法学研究科専任講師



いけないと思います。まわりの支えがあってこそ自分ですから、そこにどう感謝していくのかが最大限の努力をしていく。それが次のステップにつながっていくと思っています。

相澤 いま私が女子学生を見ていて

思うのは、ロールモデルを求めているということですね。男子学生を排除しているわけでは決してないのですが、私の研究室に訪ねてくるのも女子学生が多い。最初は勉強の質問や進学の相談にくるんですが、次第に私自身のプライベートなヒストリーに関心が増えてくる(笑)。でも、その気持ちはよくわかります。そういうとき、私は学生に、自分がどういう人との出会いやつながりの中で育てられ、生かされてきたのかという話をしてあげることが多いです。私自身、ロールモデルになる方とめぐり逢えて嬉しかったですし、それが力にもなっているからです。小野さんの存在は、外交官をめざす女性には大きいと思います。だいいち、偉くなくても少しも偉ぶらない(笑)。

小野 貫禄がないとも言える。いまでもコピー機のメンテナンスの人やピザ屋さんが出前に来ると、真っ先に私の机にやって来るくらいです(笑)。

良い外交官の条件はチャーミングであり、人から信頼されること

相澤 現在の企画官というお仕事は、具体的にはどういうお仕事なんですか。

小野 最近、組織が変わり、2つの部門が一緒になりましたが、私自身はODAの様々な分野の政策や方針の策定を担当しています。途上国への経済協力をどういうふうに行っていくのがベストであるのか、考えていく仕事です。国際社会のなかで、日本の経済協力に対する考え方は欧米とはかなり異なります。教育を例にとると、欧米はアクセスを増やすことに力点を置いている。学校を建てる・教師の給料をあげるといった方法で、子どもたちが教育を受ける機会と教育に携わる人材を確保していくというやり方です。これに対して、日本は質を大事にする考え方を取っており、教育制度の向上や教材開発などを支援します。保健分野でもそう。欧米諸国が抗エイズ薬やワクチンの配布に重点を置くのに対して、日本は母子保健や保健所の普及をめざしています。

相澤 システムをよりよい方向に変えていくのは大事なことだと思いますが、即時的な効果という意味では目に見えにくいではありませんか。

小野 その通りですね。日本が協力した実験等を重視する教育法でアフリカの子どもたちの理数系の学力が向上したといった実績はありますし、持続的な効果は期待できるのですが、なかなか評価されにくいんです。それに加えて、日本のODA拠出額は過去の1位から後退している。2007年度には5~6位になる見通しもあります。国際機関では拠出額が高いほど発言力が強くなりますし、世界の目はどうしてもトップドナーへと向きます。また、国内でもODAに対する理解は、決して十分とはいえません。日本のODAの方針を世界と日本国内に理解してもらうことも、重要な課題です。

相澤 外交官というと一般的には個人の力量が問われる仕事というイメージが強いのですが。

小野 現在の仕事では特に、チームプレイが大事ですね。他国を相手に戦うという意味で外交官は軍人と比較されたりしますが、大きな違いがある。軍人は偉くなるほど前線から離れますが、外交官は逆なんです。キャリアが浅いうちは与えられた環境でベストを尽くすことに集中していればよかったのですが、いまはそうはいきません。部下的な立場にあたる人がベストを尽くせる環境をつくるという責任が伴ってきました。不義理・無責任は絶対にするなという祖父の教えを守っていきたく



と思っています(笑)。

相澤 それも優れた外交官の条件かもしれない(笑)。

小野 いい外交官の条件は、人間としてチャーミングであることと、信頼できる人と思われること。まだまだ発展途上ですから、努力していきたいと思っています。

相澤 期待しています。ぜひ、しなやかで自然体な魅力を、ますます磨

対談を終えて

「外交官になるには、どうしたらいいのですか。」この問を携えて、小野さんを訪ねてから15年になる。出会った日の最後、小野さんは、「またいつでもどうぞ。これからは、外務省の話の聞きにというのではなく、お友達のところに遊びに行くような気分でしたら

てください」と言って、見送ってくださった。感激した大学1年の私は、その言葉を顔面通りに受け取り、その後毎年1、2回は霞ヶ関に「遊びに行く」ようになった。小野さんとの交流は、私が外交官を志望しなくなった後も続いている。それは、彼女との交流が、私に、生涯の仕事をもって生きることの尊さを、認識あるいは再認識させてくれる質のものだったからだと

思う。誠実に努力している人には、自ずとふさわしい道が与えられるのではないかと。また、我々は、与えられたものとしての道を、少しでも人のお役に立てればとの祈りにも似た思いをもって歩むのであれば、必ずや生かされ、どの道も歩もうとも難い生き方ができるのではないかと。小野さんの自然体の生き方は、私にそう語りかけてくださる。(相澤美智子)